

日本海沿岸に残る舟小屋の構法・立地・ 使い方に関する研究

香川大学工学部 釜床美也子

1. はじめに

研究の背景と目的

日本海沿岸には、53 の集落において、木製の舟を収納・保護する目的でつくられるようになった舟小屋が現存していると言われている（2000 年調査）。太平洋側に比べて干満の差が少なく、冬期は降雪量・降雨量が多いため日本海側で舟を守る小屋が発達したと見られ、日本海の漁村文化の象徴とも言える重要な建物と言える。日本での分布は青森から長崎まで広範囲にわたるが、こうした舟小屋はアジアでもほとんど見られないとされている。現在、生業や家族形態の変化、材料や職人不足から、本来の舟小屋の形を継承することは困難になっており、損失も急速に進んでいることから、緊急性の高い対象と考え、調査対象に選定した。

本研究は、現存する各地の舟小屋の材料・構造・立地・建物の使い方の比較分析により、その建築的・文化的特徴を明らかにする事を目的として研究を行った。

研究の方法

予備調査と既往研究に基づき、特徴的な構法や配置の見られる伊根・新井崎（京都府与謝郡伊根町）、隠岐（島根県隠岐郡）、奥原（石川県七尾市奥原町）、岩車（石川県鳳珠郡）、三方五湖（福井県三方上中郡若狭町）、寺家（石川県珠洲市寺家）、田井・成生（京都府舞鶴市田井）、筒石（新潟県糸魚川市筒石）、木場潟（石川県小松市三谷町）の 9 集落を対象地に選定した。それぞれで ①図面作

成、②小屋の使い方や施工法のヒアリング、③写真や映像による記録、を実施し、比較分析を行った。研究期間は平成 26 年度～平成 27 年度であるため、平成 26 年度はこのうち、三方五湖、奥原、岩車、寺家、木場潟、の福井から石川に位置する 5 集落の舟小屋について調査を行った。また、調査にあたり広範な既往研究を再収集した結果、これまで日本海沿岸に限るとされていた舟小屋が、愛媛（愛媛県西宇和郡伊方町大佐田）にも現存することが分かった。また、最南端の長崎の対馬の青海（長崎県対馬市峰町青海）は、壁を石積みとし、藻の貯蔵場を兼ねるなど、構法や使い方に顕著な違いがあることが分かった。そこで、現存する舟小屋の総合的な位置づけのため、その 2 県の事例についても同様の調査を実施することにした。

2. 福井・石川の舟小屋（若狭町）

平成 26 年度に実施した福井から石川に位置する 5 集落（三方五湖、奥原、岩車、寺家、木場潟）の中で、三方五湖（福井県三方上中郡若狭町）の舟小屋は、掘立柱に茅葺き屋根の最も古い形式を残していたことから、特にその成果について詳細に報告する。

掘立柱に茅葺き屋根の舟小屋は若狭町の北庄に 5 棟、伊良積に 2 棟現存する（写真 1）。



写真 1 若狭町の舟小屋の位置

同様の構造・屋根葺き材の舟小屋が数年前まで新潟や兵庫にも見られたとされているが、それらは既に取り壊されており、現在は福井の事例を残すのみとなっている。

格納されたのは、漁のための舟ではなく、農耕用の舟である。北庄と伊良積は、水田や耕地が少なかったため、湖の対岸や水月湖畔などに水田や梅畑を持ち、その往来に舟を使用していた。2 集落は明治以降三方湖では漁業権を持たない。もとは各農家が舟小屋を所有しており、家に近い湖畔に建てるものと、北庄のように 1 カ所の共有地にすべての舟小屋を集約して建てるものとがあった（写真 2）。昭和 50 年代に湖の護岸整備が行われて湖岸に農道が開通したため、農作業のための往来は車を使用するようになったことで舟を使う用途をほぼ終えることになった。



写真 2 北庄の 5 棟の舟小屋

建物の規模は舟の数によって決まり、1 艘曳きと 2 艘曳きの 2 通りの大きさがある（北庄に 2 艘曳きが 2 棟現存し、他の 5 棟は 1 艘曳き）。梁間は 1 艘が 1 間、2 艘が 10 尺程度であった。桁行方向はいずれも 3 間半程度でほぼ同じであった。桁行方向の柱の数は、いずれも 5 本とだけ決まっていて（写真 3）、柱間の正確なモジュールは見出す事ができなかった。柱径は 4 寸～1 尺と様々で、そのうち 1 尺ほどを地中に打ち込む。柱の長さは 6 尺～7 尺 5 寸まで様々であった。架構は棟持柱を持つ叉首構造で（写真 4）、ホゾ加工も

ほとんど行わずにかすがいだけで固定されている（写真 5）。柱にはクリ、それ以外の小屋組にはスギが使われていた。これらの軸組部分の加工や施工はすべて所有者が自ら行う。まず小屋の規模を 1 艘曳きか 2 艘曳きかによ



写真 3 立面



写真 4 架構



写真 5 結合部

って決定し、定型の大きさに掘立柱をたて、梁桁を渡す。材料はすべて里山から調達する。小屋組の架構までは所有者が行い、その後茅葺き職人に屋根葺きを依頼する。屋根の茅葺きは主屋の葺き方と同じで、屋根のみが職人技術と言える。簡易な附属小屋でありながら、藁を主体とした耐久性の低いものではなく、集落の茅場で収集したススキを使用していたのは特筆すべきと言える。小屋組の中は竹や網などの収納空間になるため、妻部分には防風と装飾を目的とした妻飾りをつける（写真6）。現在の茅葺き屋根は、昭和50年から県の観光開発事業として修繕や葺き替えが行われてきたもので、元はトタンだったものを茅葺きに復原した小屋もある。各舟小屋の所有



写真6 破風飾り



写真7 伊良積の茅葺きの主屋と舟小屋

者は集落住民のままで、維持管理のみを町が行う仕組みとなっている。2 集落にも茅場は既になく、茅の確保も困難になっており、元は茅葺きであった北庄・伊良積の主屋もすべてトタンで覆われている（写真7）。

また、茅葺き職人は、近隣集落に北庄出身の方が1人おられるものの、既に現役を退いていることから他県から職人を呼び寄せて葺かれるようになっており、雪国固有の葺き方の継承が困難になっている。具体的には、茅葺きの段と段の間に、屋根の雪を落ち易くする目的で薄いススキの層を挿入するのがこの地域の固有の葺き方であることが分かり、その伝承が臨まれる。

なお、これまで若狭町の茅葺きの舟小屋は半分が水中にあるとされていたが、ヒアリングにより元はすべて陸上に建っていたことが新たに分かった。

3. 大佐田のフナグラ

大佐田では舟小屋のことをフナグラ（舟倉）と呼び、17棟が現存している（写真8）。格納されるのは、主に農耕用の藻を引く舟であったが、現在はその役割を終えてミカン倉庫や納屋として利用されている。付近は漁業の盛んな集落も多いが、大佐田では段々畑での



写真8 大佐田のフナグラの配置

ミカンなどの農業も盛んであるため、ヒジキ漁などの小規模な生産に留まってきた。フナグラは海岸沿いに列場に集約して建てられ、背後の住宅や畑の防風の役割も兼ねて配置されている（写真 9）。肥料にする藻はフナグラの前の砂浜で干されていたが、護岸工事によりその原型は失われている。



写真 9 海岸沿いに列状に集約して建てる

フナグラは寄せ棟瓦葺きの建物で、規模は、間口 2 間×奥行き 5～7 間程である。上屋の軒高は 9 尺 5 寸程度で、上屋のみ中 2 階建てになっているものが多く、跳ね上げ式の梯子がついている。中 2 階は作業場として使われていた。正面の下屋部分（写真 10）は当初はなかったと言われている。壁は真壁の土壁や大壁の板壁である。すべて大工による普請であ



写真 10 正面

る点が原初的な若狭町の舟小屋と異なるが、強風地域であるためフナグラの腰板部分は付近で採れる平積みの練り壁となっており、それは住民自身の手でつくられていた。また、海岸に面する瓦の上には石を並べて重しとした。

4、青海のフナヤ

対馬の舟小屋はフナゴヤ、フナヤ（舟屋）と呼ばれる。対馬は肥料となる藻を貯蔵するモゴヤが海岸沿いに多数つくられた地域で、そのモゴヤがフナヤを兼ねることが多かったためか、フナヤの数はもともと少ない（写真 11、12）。対馬でフナヤが現存するのは青海



写真 11 フナゴヤとモゴヤの位置



写真 12 正面

のみで、2 棟確認することができた。青海には 4 棟のモゴヤも残っており、フナヤは浜辺に形成され、モゴヤはその内側に配置される。フナヤとモゴヤはともに断面形状は同じで、壁を野面積みとして和小屋の小屋組をかける（写真 13）。現在は棧瓦葺きであるが、元は石積みの壁から叉首をかけ、掘立の棟持柱で支える小屋組で、青海の海岸で採れた粘板岩を葺き石とした石屋根だったことが分かった。

梁間は 11 尺程度、軒高は 5 尺 7 寸程度で、桁行はフナヤが 6 間半で（モゴヤは梁間長さはフナヤと同じだが、桁行が 4 間程度と短い）、奥行きが深い。これらの壁の石積みや、屋根石の採石・施工も住民自らが行っていた。現在はモゴヤ、フナヤ、ともに物置となっている。



写真 13 内部

4. まとめ

藻を肥料とした農耕を行っていた大佐田や青海では舟小屋の正面に藻の乾燥場所が併設されていた。そして、舟を格納するためにいずれも浜辺や湖岸から数メートルの場所に建てられていた。大佐田や青海のような強風地域では、連続的に配置して強風による倒壊と、背後の集落への風よけが意図された配置となっていた。青海の壁を野面積みとして掘立の棟持柱で棟木を支持する方法は、掘立柱の茅葺きであった若狭町の舟小屋とともに原初的

な形状を伝えていると考えられる。予定していた 9 集落に加え、今年度愛媛や長崎の事例を入れたことで、単一の単純な機能と思われた素朴な舟小屋の、材料・構造・立地・建物の使い方における地域的多様性の一端を示すことができたと考える。居住の用途にまで舟小屋が展開したのは新潟から福井にかけての日本海沿岸の特徴であることが分かったため、その差異については今後詳細に分析を行いたい。

舟小屋は、定説では太平洋側に比べて干満の差が少なく、冬期の降雪量・降雨量の多い日本海側を象徴する建物となっているが、大佐田のフナグラは福井から新潟にかけて見られる舟小屋との構造や機能上の共通点も多いため、太平洋側にも一部建てられていた可能性も出てきたと言える。他の地域の追加調査も含め、その総合的な位置づけを来年度の課題としたい。